

第15回山階芳麿賞贈呈式・受賞記念講演

# 「鳥から見える地球環境の変貌」

平成20年9月23日（火・祝） 13:30～15:20

有楽町朝日ホール

主催：(財)山階鳥類研究所 共催：朝日新聞社  
後援 文部科学省、環境省、農林水産省、我孫子市  
(財)世界自然保護基金ジャパン  
(財)日本自然保護協会、(財)日本野鳥の会  
(財)日本鳥類保護連盟、日本鳥学会

# 目次

## 山階芳麿賞贈呈式・受賞記念講演

---

プログラム	3
司会者の紹介	3
総裁のおことば	4
山階芳麿賞贈呈式にあたって	5
立川涼氏への贈呈理由	6
第15回山階芳麿賞受賞者の紹介	7
受賞記念講演「鳥から見える地球環境の変貌」	8
<hr/>	
山階芳麿賞の紹介	10
山階鳥類研究所の紹介	11

# 第15回山階芳麿賞贈呈式・受賞記念講演 「鳥から見える地球環境の変貌」

平成20年9月23日(火・祝) 13:30～15:20

有楽町朝日ホール

## 第15回山階芳麿賞贈呈式

おことば	山階鳥類研究所総裁	秋篠宮文仁
贈呈理由	山階芳麿賞選考委員長	山岸 哲
表彰状と記念メダルの贈呈	山階鳥類研究所総裁	秋篠宮文仁
副賞「朝日新聞社賞」の贈呈	朝日新聞社事業担当	後藤尚雄

## 受賞記念講演 「鳥から見える地球環境の変貌」

受賞者	愛媛大学名誉教授	立川 涼
-----	----------	------

## 閉会のあいさつ

朝日新聞社事業担当	後藤尚雄
-----------	------

司会：松田輝雄

## 司会者の紹介

松田輝雄

元NHKアナウンサー。  
環境 自然に強い関心を持ち、  
現在も番組への企画に参加。  
日本野鳥の会顧問。樹木医。



# 総裁のおことば

秋篠宮文仁



財団法人山階鳥類研究所は、平成4年に設立50周年を迎えました。それを記念して創立者である故山階芳麿の功績を讃え、国内において鳥学および鳥類保護に顕著な功績のあった方に贈る「山階芳麿賞」を創設いたしました。

本日 その山階芳麿賞の第15回贈呈式、ならびに記念講演会を開催できますことは、私にとりまして大きな喜びであります。このたび賞を受けられる 愛媛大学名誉教授の立 涼博士に心からお祝いを申し上げます。

立) 博士は、永年にわたり人間活動由来の有害化学物質が生態系に及ぼす影響についての研究を続けてこられました。その一環として 鳥類についても 産卵、換羽渡りをはじめとした生命現象の解析によって 有害物質の蓄積に変動があることなど 数々の興味深い事実を明らかにされました。そして 生態系のさまざまなレベルにおける汚染の実態を明らかにすることにより 社会に警鐘を鳴らし、国や自治体の環境政策に大きく貢献をされました。これらのことが、山階芳麿賞選考委員会において高く評価され、贈呈の運びとなりました。

近年、地球温暖化の問題が注目を浴びておりますが、地球温暖化と同様、有害化学物質の問題も 私たちの生活の利便を目的として行われたことが回り回って地球環境全体に影響を与えている深刻な問題です。それらはいずれも原因となることから起きてから問題が現れるまで また対策が取られてから効果が現れるまでに長い時間がかかるため、早急な対応が必要になってまいります。

本日は、有害化学物質研究に先鞭をつけられた立) 博士の受賞記念講演「鳥から見える地球環境の変貌」が行われます。そのなかで 鳥の不思議な体の仕組みについて知ることができ 地球環境に化学物質がどのような影響を与えているのか、そして私たちに何ができるのかについて考える機会になるものと思います。

終わりに、立) 涼博士ならびに博士の薫陶を受けられた研究者の方々のご研究が今後ますます発展し、さらなる活躍をされますことを祈念し、私の挨拶といたします。

# 山階芳麿賞贈呈式にあたって

財団法人 山階鳥類研究所 理事長 島津 久永

本日 平成20年度の山階芳麿賞贈呈式を開催することができましたことは誠に喜ばしく、これもひとえに選考委員はしめご関係の皆様のご支援の賜物と感謝いたしております。山階芳麿賞は、日本の鳥類学の研究または鳥類の保護に関し、特に顕著な功績のあった方々を顕彰することを目的として創設されたもので、今回で第15回目となります。



このたび受賞者となられました立川 涼博士は、わが国における環境汚染研究の先駆者であり、BHC、PCB、ダイオキシンなどの有機塩素化合物や、カドミウム、水銀などの重金属類による地球環境の汚染の実態を明らかにされ、特にそれらの汚染物質が海洋に棲む魚類、哺乳類、海鳥類の体内に高濃度で蓄積されていることを指摘されました。博士は、人工的に作られた化学物質は、主としてそれらが気化して大気の流れに乗ることにより、生産された地域にとどまらず、南北両極を含む地球全体に広がっていることも明らかにされました。このことから博士のご研究は、鳥類に限ってみても、日本の鳥だけでなく、韓国のサギやシギ、チドリ類、北太平洋の海鳥類から南極のペンギンに至るまで幅広く対象として取り上げておられます。また博士は、環境化学、環境ホルモン研究の第一人者として、日本政府の化学物質汚染対策立案に際して多くの助言をされたほか、各種メディア等を通じ、一般市民への啓蒙活動などにも努めてこられました。さらに、博士の門下からは数多くの優秀な人材が輩出しています。40年以上に亘って緻密かつ実証的な研究を続けてこられました博士のご熱意とその成果に深く敬意を表するとともに、心よりご受賞のお祝いを申し上げます。

立川 博士は鳥類学者ではありませんが、以上のとおり鳥類はしめ生物の体内における化学物質や重金属の高濃度蓄積の問題を通して、生物多様性の維持にも重大な関係のある研究を進めてこられました。従来、山階芳麿賞を受賞された方々は、いずれも鳥類の研究を専門分野としておられる方々でしたので、今回の決定は、これまでよりも広い意味で鳥類と係わりのある方を対象とした、という点で画期的なものであると存じます。

最後になりましたが、ご共催いただきました朝日新聞社および文部科学省、環境省、農林水産省、我孫子市をはじめとするご後援の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

## 立川涼氏への贈呈理由

山階芳麿賞選考委員長  
財団法人山階鳥類研究所所長

山岸 哲



立川涼氏は、超微量分析の手法によって、人間活動に由来する有機塩素化合物や重金属などの汚染物質の、生態系における分布 挙動、影響などを明らかにされました。中でも PCB やダイオキシン類が、水質、大気、生物、人体や母乳に至るまでを広く汚染している状況や、カドミウムや水銀などの重金属類による地球規模での汚染の実状について 生態系の頂点に立つ海棲哺乳類や、海鳥類、大型魚類を初めとするさまざまな生物を対象として 組織部位別、年齢別の詳細な分析から明らかにされ、有害物質が食物連鎖をたどりながら生物濃縮されてゆく実態を究明されました。

その過程で 鳥類に限っても、種や生息環境によって有害物質の蓄積の状況が異なることを示されました。また、長寿命高等動物においては、妊娠や産卵といったそれぞれの分類群特有の生物過程によって有害物質の蓄積に変動があることを明らかにされ、鳥類では特に産卵、換羽、渡りなどの過程で体内の蓄積に劇的な変化が生ずる点で 他の分類群の動物と際だった差異があることを示されました。

また、環境化学の教育に力を注ぎ 東南アジア諸国などの発展途上国の留学生も積極的に受け入れ、汚染物質研究における国内外の人材育成に大いに尽力されました。

そして さまざまな分類群における汚染の実状を明らかにすることにより 社会に警鐘を鳴らすとともに、国や地方自治体の環境政策に大きく貢献されました。

このように、立川涼氏の研究は、人間活動由来の汚染物質による生態系ならびに生物多様性への影響についての研究の礎を築かれたものであり 氏の後進の教育 社会への啓蒙の功績、ならびに環境行政への貢献もまた目覚ましいものと考えられます。氏の研究対象は鳥類に限定されていませんが、上記のように鳥類での成果は極めて重要なものです。そこで 山階芳麿賞選考委員会は、鳥類の学術研究と保護の功績を重視して選考する山階芳麿賞に誠にふさわしいものと判断し、第 15 回山階芳麿賞を立川涼氏に贈呈することにいたしました。



### 山階芳麿賞のメダル

表 山階芳麿博士の肖像  
裏 ヤンバルクイナのレリーフ  
受賞年と受賞者の氏名が刻印される

# 第15回山階芳麿賞受賞者の紹介

## 立川涼 愛媛大学名誉教授の略歴と主要研究業績

- 【氏名】 立川涼 (タツカワ リョウ)
- 【生年月日】 1930年12月25日 ウル生れ
- 【学歴】 1953年3月 東京大学農学部農芸化学科卒業  
1958年3月 東京大学農学部大学院研究奨学生後期満了  
1962年3月 農学博士 (東京大学)
- 【職歴】 1958年4月 東京大学助手 (農学部農芸化学科土壌学)  
1963年8月 米国オハイオ州立大学農学部アグロミー学科リサーチフェロー (~1964年10月)  
1966年5月 愛媛大学助教授 (農学部農芸分析学)  
1976年4月 愛媛大学教授 (農学部環境化学)  
1987年4月 愛媛大学大学院連合農学研究科長 (~1991年3月)  
1993年6月 愛媛大学農学部長 (~1995年5月)  
1995年9月 高知大学学長 (~1999年9月)  
2000年4月 愛媛県環境創造センター所長 (~現在)
- 【称号】 1995年9月 愛媛大学名誉教授  
1999年9月 高知大学名誉教授

### 【主な専門分野】 環境化学

#### 【鳥類に関する主な研究業績】

◆鳥類の残留毒性に関する研究 I - 有機塩素化合物 環境庁委託研究報告書 52頁 (1973) ◆同上 II - 重金属汚染調査 68頁 (1974) ◆同上 III - フタル酸エステルおよび重金属汚染調査 82頁 (1976) ◆ Heavy metal distribution in organs and tissues of the Eastern Great White Egret. *Bull. Environ. Contam. Toxicol.*, 35: 781-789. (1985) ◆ Transfer rates and patterns of PCB isomers and congeners and p,p'-DDE from mother to egg adelic penguin. *Chemosphere*, 15(3): 343-351. (1986) ◆ Bioaccumulation and metabolism of PCBs and DDE in short-tailed shearwater during its transequatorial migration and in the wintering and breeding grounds. *Mem. Natl. Inst. Polar Res.*, (40): 434-442. (1986) ◆ Seasonal changes in mercury accumulation in the Black-tailed Kite, *Environ.*

*Pollut.*, 42(4): 325-334. (1986)

◆ Lead poisoning in swans in Japan. *Environ. Pollut.*, 65: 209-218. (1990) ◆ Cytochrome P-450 forms and its inducibility by PCB isomers in black-headed gulls and black-tailed gulls. *Mar. Pollut. Bull.*, 24(6): 316-321. (1992) ◆ Embryonic abnormality and organochlorine contamination

in double-crested cormorants and Caspian tern from the upper Great Lakes in 1988. *Environ. Pollut.*, 79(2): 163-173. (1993)

◆ Distribution, biomagnification, and elimination of butyltin compound residues in common cormorants from Lake Biwa, Japan. *Arch. Environ. Contam. Toxicol.*, 31(2): 210-217. (1996) ◆ Specific accumulation of mercury and selenium in seabirds. *Environ. Pollut.*, 94(3): 261-265. (1996) ◆ 野生動物の重金属蓄積はどのようにして決まるか - その測り方と読み方 - くらしお (高知大学黒潮圏研究所所報) (13) 6-13. (1999)

#### 【著書】

◆『環境化学と私 - 道後平野から世界へ』 (創風社出版 95年) ◆『提言ダイオキシン緊急対策』 (編著 かもがわ出版 99年) ◆『これからの大学 これからの地球 - 高知大学と私』 (南の風社 99年) ◆『21世紀を想う - 教育 環境 諸事』 (創風社出版 07年)

#### 【社会活動】

環境庁瀬戸内環境保全審議会委員ほか、国 地方自治体審議会等委員、トヨタ財団理事など歴任、ダイオキシン 環境ホルモン対策国民会議 (NPO) 代表 (1998 ~)、黒潮実感センター (NPO) 理事長 (2002 ~)

#### 【受賞 表彰】

愛媛県政表彰 (愛媛県 1981年)、功労賞 (日本水環境学会 1992年) 放送文化賞 (日本放送協会 1993年)、三宅賞 (地球化学研究協会 1998年)、日本引用最高栄誉賞 (ISI 2000年)、瑞宝重光賞 (2007年)



# 鳥から見える地球環境の変貌

愛媛大学名誉教授 立川 涼

農薬による環境汚染によって春が来ても鳥が鳴かなくなった。『沈黙の春』(1962)の鮮烈なメッセージは社会をゆすぶった。例の如く 企業はもとより研究者の中にも批判者は多く むしろ、彼女は四面楚歌であった。それは先駆者の特権のようなものかもしれない。しかし、当時の米国大統領 J.F. ケネディは、流石に慧眼、農薬の安全について国の調査研究の充実と大学教育の強化を指示した。それは流れを変える重要な決断であった。

私は、1966年、東京から愛媛大学への赴任挨拶に「環境化学」をやりたい、化学から環境問題を攻めたいと書いた。とは言っても研究器材も講座費も貧弱、何もすることがない。まずはお金のいらないゼミから始めようと『沈黙の春』を読んだ。毎週一回、午後から始めて1人一章、終了まで深夜に及ぶこともあった。ひそかにデスマッチといわれていたらしい。

もともと土壤学者であった私は水や土壌の農薬 BHC 汚染から手をつけた。1973年環境庁から 松山市周辺の鳥類の残留性有機塩素化合物に関する委託研究を受け 引き続き 1974年には重金属調査を実施した。周辺山地、道後平野、海浜にわたる 23種 221羽を分析した。この仕事が研究室の鳥類だけでなく野生動物調査研究の方法論を生むきっかけとなった。研究は瀬戸内から外洋に広がり 極地にまで及んだ。地球規模の研究をはしめから意図した訳ではなく、化学物質の運命を追っているうちに仕事は地球規模に広がった。ついでながら研究室で収集分析した試料は極力冷凍保存することにして、現在まで愛媛大学沿岸環境科学研究センターのスペシメンバンクには、世界各地から捕集した鳥類 364種 28,251点(羽ではない)が保管されている。

有害化学物質の生物蓄積は、化学物質の特性と生物側の要因で決まる。生物には機能の異なる多様な組織 器官があり その特性に応じた化学物質の蓄積が見られる。さらに、生物に固有の生物過程—鳥類では産卵、渡り 換羽、尾腺からの分泌—なども化学物質の蓄積を左右する。

有害化学物質は、Hg(水銀) Cd(カドミウム) Pb(鉛)など“重金属類”と人工有機化合物、その代表的なものはPCB、DDT ダイオキシンなど有機ハロゲン化合物、に二大別される。この両者は、



その発生源、環境や生体内での分布 移動 蓄積あるいは毒性に大きな相異がある。

まず 第一に、重金属は人類の出現以前から 地球に自然賦存量として存在していた。鳥からダイオキシノやPCBを検出すれば、これは間違いなく汚染—人間活動の結果であり 人類社会は汚染の低減について技術的、社会的に対応が可能である。しかし、水銀やカドミウムが検出されたからといってそれがすべて人間活動の結果としての汚染とはいえない。アホウドリの肝やトビの羽には高濃度の水銀が蓄積しているが、その大半は自然的蓄積である。

第二に重金属と人工有機化合物では生体を含む環境内での存在形態が異なる。難分解性蓄積性のPCB、ダイオキシノ等は専ら脂肪組織での濃度が高い。ところが重金属は元素ごとに複数の原子価を持つことが多く またタンパク質などと結合して 多様で複雑な存在形態を持つ。

第三に存在形態が変われば、消化系での吸収率が変化する。鳥の餌としての魚貝類中のPCBはほぼ全量が吸収されるが、餌中カドミウムはおそらく数%以下の吸収率であろう。しかも、この吸収率は餌の組成によっても左右される。たとえば、小魚など骨の多い餌では低く、イカなどでは高くなると考えられている。

北太平洋のクロアシアホウドリでは、PCBは100ppm(湿重)を越し、ダイオキシノ値もヒトより2桁程度高い。この濃度は何等かの毒性影響を示唆する。人間活動域から遠く離れた生物に高濃度の蓄積が見られることは興味深い。

DDTはマラリア防除のため熱帯低緯度地方での使用が続いており また、経済の発展とともにPCBなどの使用とその汚染も上昇している。そのことが現地での鳥類の汚染にも反映する。さらに、東アジアでの渡り鳥は、北上中にも有機塩素濃度が上昇し、繁殖地到達時に最高濃度となる。北方地域での繁殖活動を営む間に、卵胚に有機塩素化合物の毒性影響が現れる可能性がある。だとすれば、汚染の顕在化していない地域で その毒性影響が発現することを暗示している。

最近の環境ホルモン問題は化学物質の毒性影響について 全く新しい課題を突きつけた。脳神経毒性、生殖影響、次世代影響、多成分系での毒性など、広く鳥類の将来も左右するテーマであるが、ホットな研究課題であり今後の発展に期待したい。

残留性有機塩素系化合物は長寿命野生動物に高蓄積される。従って毒性影響の詳細を理解するためには年齢情報が欠かせない。鶴は千年、亀は万年といわれているが、今のところ鳥類やウミガメの正確な年齢判定法はない。正確な年齢のわかる鯨類では胎児期から数十年に及ぶ生涯の有機塩素の推移が明らかになっている。鳥類では細かい議論は難しい。ウミガメや鳥類の年齢判定法ができれば、汚染影響の研究は格段に前進するであろう。

夢中で走ってきた仕事の中で いろいろと鳥とはご縁があった。しかし、私はハシブトガラスとハシブノガラスの見分けも怪しい。ここでは環境化学者が見た鳥の話を見せていただきたい。

# 鳥から見える地球環境の変貌

愛媛大学名誉教授 立川 涼

農薬による環境汚染によって春が来ても鳥が鳴かなくなった。『沈黙の春』(1962)の鮮烈なメッセージは社会をゆすぶった。例の如く 企業はもとより研究者の中にも批判者は多く むしろ、彼女は四面楚歌であった。それは先駆者の特権のようなものかもしれない。しかし、当時の米国大統領 J.F. ケネディは、流石に慧眼、農薬の安全について国の調査研究の充実と大学教育の強化を指示した。それは流れを変える重要な決断であった。

私は、1966年、東京から愛媛大学への赴任挨拶に「環境化学」をやりたい、化学から環境問題を攻めたいと書いた。とは言っても研究器材も講座費も貧弱、何もすることがない。まずはお金のいらないゼミから始めようと『沈黙の春』を読んだ。毎週一回、午後から始めて1人一章、終了まで深夜に及ぶこともあった。ひそかにデスマッチといわれていたらしい。

もともと土壤学者であった私は水や土壌の農薬 BHC 汚染から手をつけた。1973年環境庁から、松山市周辺の鳥類の残留性有機塩素化合物に関する委託研究を受け 引き続き 1974年には重金属調査を実施した。周辺山地、道後平野、海浜にわたる 23種 221羽を分析した。この仕事が研究室の鳥類だけでなく野生動物調査研究の方法論を生むきっかけとなった。研究は瀬戸内から外洋に広がり 極地にまで及んだ。地球規模の研究をはしめから意図した訳ではなく 化学物質の運命を追っているうちに仕事は地球規模に拡がった。ついでながら研究室で収集分析した試料は極力冷凍保存することになっているが、現在まで愛媛大学沿岸環境科学研究センターのスペシメンバンクには、世界各地から捕集した鳥類 364種 28,251点(羽ではない)が保管されている。

有害化学物質の生物蓄積は、化学物質の特性と生物側の要因で決まる。生物には機能の異なる多様な組織 器官があり その特性に応じた化学物質の蓄積が見られる。さらに、生物に固有の生物過程—鳥類では産卵、渡り 換羽、尾腺からの分泌—なども化学物質の蓄積を左右する。

有害化学物質は、Hg(水銀) Cd(カドミウム) Pb(鉛)など“重金属類”と人工有機化合物、その代表的なものは PCB、DDT ダイオキシンなど有機ハロゲン化合物、に二大別される。この両者は、

# 山階芳麿賞の紹介

## 山階芳麿賞とは

● 山階芳麿賞は、財団創立 50 周年にあたる 1992 (平成 4) 年に、山階鳥類研究所の創設者である山階芳麿博士 (1900-1989) の功績を讃え、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

● 山階鳥類研究所所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者 (個人または団体) を選考します (委員会の構成は下欄を参照)

● 受賞者には、山階鳥類研究所の総裁、秋篠宮文仁親王殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリフをあしらい、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第 12 回 (2003 年) の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金 50 万円と盾) が贈られることになりました。

### ● 歴代受賞者

第 1 回 羽田健三 (信州大学名誉教授) \*、第 2 回 松山資郎 (山階鳥類研究所顧問) \*、第 3 回 中村司 (山梨大学名誉教授) 第 4 回 黒田長久 (山階鳥類研究所所長) 第 5 回 中村登流 (上越教育大学名誉教授) \*、第 6 回 正富宏之 (専修大学北海道短期大学教授) 第 7 回 樋口広芳 (東京大学大学院教授)、第 8 回 山岸哲 (京都大学大学院教授) 第 9 回 藤巻裕蔵 (帯広畜産大学教授) 第 10 回 小城春雄 (北海道大学大学院教授) 第 11 回 中村浩志 (信州大学教授) 第 12 回 石居進 (早稲田大学名誉教授)、第 13 回 由井正敏 (岩手県立大学教授)、第 14 回 長谷川博 (東邦大学教授) いずれも受賞当時の役職、\* 故人

## 山階芳麿博士について



山階芳麿博士は、1900 (明治 33) 年 7 月 5 日 山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学 (現東京大学) 理学部動物学科選科に入学、動物学の基礎を学びました。同選科を 1931 (昭和 6) 年に修了 1932 (昭和 7) 年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館

を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア 太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939 (昭和 14) 年から、北海道帝国大学 (現北海道大学) の小熊捍教授の指導で研究を行い 1942 (昭和 17) 年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を 1949 (昭和 24) 年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより翌 1950 (昭和 25) 年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ 日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977 (昭和 52) 年、一ベル賞受賞者 K. ローレンツ博士などわずか数人に与えられたジャン デラクール賞を受賞、翌 78 (昭和 53) 年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989 (平成元) 年 1 月 28 日没、88 歳。主要著書に『日本の鳥類と其生態』(第 1 巻 1933、第 2 巻 1941)、『世界鳥類和名辞典』(1986) 他、論文多数。

## 山階芳麿賞選考委員の構成

委員長：山岸哲 ((財) 山階鳥類研究所所長)

委員：石居進 (早稲田大学名誉教授)、岡奈理子 ((財) 山階鳥類研究所鳥学研究室長)、岡安直比 ((財) WWF (世界自然保護基金) ジャパン自然保護室長)、中村慎一 (共同通信社ニュースセンター整理部長)、中村浩志 (信州大学教育学部教授)、林良博 ((財) 山階鳥類研究所副所長)、藤原正信 (日本放送協会解説委員)、増井光子 (よこはま動物園ズーラシア園長)、渡辺茂 (慶応義塾大学文学部教授)、柏原精一 (朝日新聞社科学グループ「日曜 be」チーフ) 五十首順

# 山階鳥類研究所の紹介

## 山階鳥類研究所の歴史と概要

山階鳥類研究所は、山階芳麿博士（1900-1989）が1932（昭和7）年に私費を投じ、東京渋谷南平台の山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。1942（昭和17）年に文部省（当時）から許可を得て財団法人として発足しました。第二次大戦の空襲で山階邸が全焼したにもかかわらず研究所は焼失をまぬがれ、博士の収集した貴重な鳥類標本約2万点が無傷で残りました。戦後は、研究所の小さな建物に日本鳥学会、動物分類学会、日本生物地理学会、日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟などの学会や鳥類関係諸団体の事務局が身を寄せ合い再発しました。

山階鳥類研究所は戦前戦後を通じて多くの鳥類研究者を育て数々の業績をあげましたが、建物が老朽化し手狭になったことから、1984（昭和59）年、千葉県我孫子市高野山の手賀沼畔に移転し、現在に至っています。また1986（昭和61）年からは、秋篠宮文仁親王殿下を総裁としてお迎えしています。

現在、山階鳥類研究所は以下の5つの部門で構成されています。日本最多の鳥類標本と文献を所蔵する機関として鳥類学者や鳥類研究を志すアマチュアの方々へも研究の場を提供し、鳥類全般に関する科学研究を行っています。



東京渋谷南平台の旧研究所



千葉県我孫子市の現研究所

### 資料室：

鳥類標本約69,000点と鳥類を主とする図書資料約39,000を所蔵。これら資料の収集と維持管理を担当しています。

### 鳥学研究室：

環境保全や社会活動に役立てるために、鳥類の生態や生理、系統分類など基礎生物学的な研究を行っています。主に希少鳥類のDNAの研究や、日本で大半が繁殖するオオミズナギドリの生態や生理の研究に取り組んでいます。

### 標識研究室：

環境省委託の鳥類標識調査を行うほか、鳥類標識センターとして国内外の調査者の育成、標識データのとりまとめを行っています。ヤンバルクイナの生態研究や、アホウドリ類の新繁殖地への誘致活動も行っています。

### 広報室：

ニュースレターの発行やホームページの作成など、研究所と外部の方々をつなぐ窓口業務を行っています。

### 事務局：

財団の活動を支えてくださる賛助会員の窓口業務や、庶務、経理など事務全般を行っています。

所員数は20名で、そのうち16名の研究員がそれぞれの部門で研究業務にあたっています。創刊以来50年余りの歴史を持つ鳥類学専門誌「山階鳥類学雑誌」を年2回、ニュースレター「山階鳥研NEWS」を隔月発行して鳥類学と地球環境保全の普及啓蒙を行っています。現在、東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んで相互に研究協力しています。

## ● ご支援のお願い

山階鳥類研究所は、日本、アジアをはじめとした膨大な数の鳥類標本、図書資料を所蔵し、内外の研究者にその情報を提供してきました。また、鳥類全般の科学的研究により国際的にも評価されており、ヤンバルクイナの新種記載、コウノトリやトキの保護への参画、アホウドリの保護・増殖事業、標識をつけて放鳥することにより鳥の生態や渡りの経路を調べる標識調査など、多くの活動を行っております。私たちはこれらの活動を通じ、地球環境の保全にも貢献しています。

山階鳥類研究所では、このような活動を支えてくださるためのご寄附を随時お受けしているほか、賛助会員を広く募集しております。賛助会員の方には、山階鳥類研究所の活動をお知らせする「山階鳥研 NEWS」(年6回発行)や、学術誌「山階鳥類学雑誌」(年2回)をお届けし、随時開催するシンポジウムなどのイベントのご案内を差し上げるほか、親睦を図る目的で賛助会員の集いを随時開催しています。

賛助会員の方々から頂戴する賛助会費は、上記のような山階鳥類研究所の研究活動や標本・図書資料の収集・維持管理などに使われます。日本の鳥類学の発展と鳥類の保護、そして地球環境の保全をめざす私どもの活動を支えてください。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。



## 賛助会員のご案内

### ○ 法人賛助会員

(年会費 105万円)

「山階鳥研 NEWS」と学術雑誌「山階鳥類学雑誌」をお送りします。

### ○ 個人賛助会員

(年会費 101万円)

「山階鳥研 NEWS」もしくは「山階鳥類学雑誌」のいずれかご希望のものをお送りします。

(年会費 1.501万5千円)

「山階鳥研 NEWS」と「山階鳥類学雑誌」の両方をお送りします。

入会をご希望の方はお手数ですが、同封のパンフレット「賛助会員入会のご案内」にあります申込書にご記入の上、はがきを切り取り、切手を貼らずにお送りください。送金には同封の郵便振替用紙(振込料金無料)をご利用ください。

なお、銀行または郵便局からの口座振替(自動引落し)によるお振込みもできます。ご希望の方には申込用紙をお送りしますので、お申し出ください。

法人賛助会員申込書および詳しい資料の請求も下記へご連絡ください。

山階鳥類研究所では、賛助会員のほかにご寄附も募っておりますので、よろしくお願いたします。

## [入会申込み・資料請求の宛先]

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115

(財)山階鳥類研究所・事務局

TEL: 04-7182-1101 FAX: 04-7182-1106

E-mail: kaiin@yamashina.or.jp

U R L: <http://yamashina.or.jp>

※ 山階鳥類研究所は特定公益増進法人です。当財団に対する寄附金は、税制上の優遇措置の対象となります。

## 第15回山階芳麿賞贈呈式・受賞記念講演 「鳥から見える地球環境の変貌」

発行日	2008年9月23日
編集・発行	財団法人 山階鳥類研究所 千葉県我孫子市高野山 115
印刷	岡田印刷(株)